

木村一信・崔在喆編 『韓流百年の日本語文学』

中根 隆行

本書に収録された十六編もの論考をひと括りにして述べるのは難しい。だが表題にあるとおり「韓流」と「日本語文学」に力点がおかれていることは間違いない。「韓流」はひとまずおくとして、「日本語文学」という呼称が近現代文学研究で一般的に使われるようになったのは一九九〇年代前半からである。それはある意味でポストコロナアル批評や文化研究の成果といつてもよいが、基本的にはそれらの方法論的導入に典型的に現れた近現代文学研究のさまざまな読解の試みや新しい担い手の登場によってもたらされたものである。この頃から日本の大学院で学ぶアジアからの留学生が一時停滞期を挟みつつも年々増加し、文学研究においてもアジアの研究者との交流が活発になった。本書もそのなかで生まれた共同研究の成果のひとつである。いまでは植民地期の朝鮮人作家の日本語創作を「日本語文学」と呼ぼうとすると、意図的でないかぎりある種の罪障感さえ感じてしまうようになった。

日本近現代文学と朝鮮というテーマでいえば、それ以前にも春日『近代日本文学における朝鮮像』（一九六九年）や高崎隆治

『文学のなかの朝鮮人像』（一九八二年）以来の研究の蓄積があった。本書でいえば金泰俊「日本文学のなかの韓国・韓国人像——民族・過去・倫理と関連して」がこの系譜に属しており、植民地期を中心に日本人作家がいかにか朝鮮人を描いたのかを論じる。また尹大石「『国民文学』の日本人小説家」では、アジア・太平洋戦争期の『国民文学』『緑旗』を中心に朝鮮での国策的な文学運動の内実が錯綜とともに描出される。ただし一九三九年の朝鮮文人協会創立まで「植民地朝鮮において日本人の文学活動はほとんどなかったといっても過言ではない」と断じるのはどうか。

同じく『国民文学』『緑旗』に言及する三谷憲正「田中英光と〈朝鮮〉言説——『京城日報』『国民文学』『緑旗』の「テクスト」をめぐって」では、田中英光の初出をめぐって『京城日報』や両誌を探索し、これまでの文献資料の誤謬を改めてゆく。田中英光『酔いどれ船』への批判は数多くなされてきたが、そのもとになった彼の朝鮮での創作活動や表現の場となったメディアの全貌は本当に把握されているのか。「戦時下の朝鮮で書かれたものと戦

後発表された「酔いどれ船」との落差を田中英光の政治的立場ではなく「表現」として見つめ直すこと」という指摘は今後の展開を見据えると非常に重要だと思われる。

それにたいして、許呉「金史良「玄界灘密航」論——語りたくない過去がある」では、エッセイ「玄界灘密航」を手がかりにその生涯において不明なところが多い金史良の渡日の際の状況を実証的に探り、その心理を密航というキーワードから読み解く。そして鄭百秀「李光洙の日本語小説『萬爺の死』——創作言語の転換と人物表象の変化」は、李光洙の朝鮮語小説から日本語小説への創作言語の転換に焦点をあてる。朝鮮人作家の日本語小説は、宗主国の言語で書くという行為自体が問題視されるため、否定的に評価されがちである。だが、鄭百秀は日本語小説『萬爺の死』の主人公を創作言語の転換によって獲得された「新しい表象」とみる。植民地期の朝鮮人作家の創作言語の選択という問題もそうだが、加えて李光洙『萬爺の死』を民族主義的イデオロギーによってはかるのではなく、テクスト表現と読者共同体という視点からとらえるものとして興味深かった。

本書収録論文のなかで明治期を扱うものひとつ、孫順玉「子規と異文化」では、正岡子規の言説を対象に朝鮮半島や外国への想像力を考察する。陸羯南から子規に伝えられた朝鮮情報や文物が示唆しているのは、この時期の朝鮮像形成の一端を担う事例でもあり、そうした文脈からみると子規の朝鮮観はどう位置づけられるのだろうか。もうひとつは瀧本和成「石川啄木と〈朝鮮〉——

「地図の上朝鮮国に……」の歌をめぐる「考察」である。あまりにも有名な「地図の上 朝鮮国にくるぐると 墨をぬりつ、 秋風を聴く」ではあるが、短歌自体のテクスト分析やこの歌が詠まれた文脈を重層的に読み解き、一九一〇年九月の啄木の「悲しみ」を分析する好論である。

勝村誠「中西伊之助文学における〈朝鮮〉」では、「緒土に芽ぐむもの」や「不逞鮮人」、「汝等の背後より」などを題材にしつつ、そこに描かれる中西伊之助の朝鮮人観、そして彼みずから日本人であるがゆえの罪責感を論じながら、朝鮮人との対話のあり方を検証する。また崔在喆「安倍能成における「京城」「京城帝大」」では、京城帝国大学教授であった安倍能成の朝鮮観を探る。中西伊之助と朝鮮人革命家との連帯を考えると、彼の農民思想やジェンダー観の位相はどうかかわるのか。安倍能成の信奉するリベラリズムは京城帝大の関を越えたのか否か、あるいはその朝鮮文化観と朝鮮人とのかわり方の違いなど、興味は尽きない。

こうみてくると作家論であるか作品（テクスト）論であるかで分かれるものの、朝鮮人作家であれ日本人作家であれ、人あるいはその作品群のなかに認められる何がしかの揺らぎを枠としてとりあげ、注視する論考が多いのがわかる。もちろんそこにこれまでの研究史という枠を加えてもよいのだが、これは本書にかぎらず「日本語文学」に力点をおく近現代文学研究の特徴といつてもよいだろうか。けれども、近現代における朝鮮半島と日本語文学

という括りは、在日コリアンによる文学の現在——朝鮮半島に紐解かれる生活史を語らない自由など——が棚上げにされる感もあるし、広い意味での歴史学や文化論の成果をなおざりに付すことにも繋がる。そこでは「日本語文学」そのものが疑義を呈される。

神谷忠孝「〔在日〕文学の行方」では、第二世代と第三世代の文学を中心に在日コリアン文学が「在日」文学へと変容する経緯をその思想性の推移とともに論じる。民族性よりも個別のアイデンティティ、祖国との関係よりも日本社会との関係に関心をもちと指摘されている第三世代の在日コリアン文学。興味深かったのは、以前では考えられもしなかった民族主義との離別という問題を鄭大成がこう評価していることである。「それは『日本人文学』の自然解体と新たな『日本文学』への広がりの意味する」。民族性や祖国から離脱しようとする在日コリアン文学が日本社会とのかかわりを縦横に描くこと。それはある意味で「日本文学」への越境であり、「在日」文学の新たな地平を切り開くかもしれない。そんな第三世代の「在日」文学として黄奉模「玄月文学における韓国・韓国人」では玄月に焦点をあてる。「蔭の棲みか」や「舞台役者の孤独」などに描かれるのは、韓国や在日コリアンというよりは済州島であり済州島人であるという。玄月文学では、四・三事件に象徴される済州島の人びとの歴史は国境を越えて往還する地域史として語り継がれ、済州島は「母の懐のような」トポスとして召還される。また花崎育代「柳美里と鷺沢萌——東京

・神奈川——錯綜と断絶をかかえて」では、「在日」する場所の描かれ方が考察の対象となる。柳美里と鷺沢萌を例に「彼女たちが、日本語で、日本の東京を、横浜を、どのように書いてきたのか、ということ」という問いが立てられるのだが、今後の「在日」文学の展開によつては「日本語で」という文節がどれだけ意味をもつのか興味深いところである。

本書のもうひとつのキーワードは「韓流百年」である。そもそも「韓流」という語には、韓国から発信されるという意味での文化的主体性とともに、それを自発的に受け入れる側の文化的主体性という相補的な見方が確保されている。一九九九年に中国で誕生した「韓流」という語は、いうまでもなく東南アジアや中国・香港、台湾そして日本における現代韓国の大衆文化の流行現象をさす言葉である。二〇〇〇年前後から韓国のテレビドラマがアジア諸国で放送されるようになり、日本はいまや経済規模で最大の「韓流」消費国となった。だが、「寒流」という揶揄を含んだ造語として誕生した「韓流」は、アジア諸国で好評を博すことで一九九七年のアジア通貨危機後に積極的に展開された韓国の文化輸出の国策的スローガンとなった、いわば逆輸入された標語でもあることを忘れてはならない。

平野芳信「『冬のソナタ』ブームの背景——『最初の夫の死ぬ物語』外伝」では、韓国における村上春樹ブームから一九九五年の韓国での『Love Letter』の大ヒット、そして日本における「韓流」ブームの契機となった『冬のソナタ』という韓国と日本を往

選した物語のなかに同系統の説話論的構造を見出ししている。日本からというよりも、そうした「構造（話型）」の汎アジア性に注目したい。また佐々充昭「韓流」高句麗ドラマに魅る日本植民地期の「大朝鮮主義史観」——「太王四神記」を中心に——では、中高年男性に人気の韓流時代劇のなかの高句麗ドラマに、申采浩の民族主義思想「大朝鮮主義」（韓永愚）の影響をみる。「朱蒙」が先駆け「太王四神記」に典型的に示唆される朝鮮古代史ものには、中国との間の歴史認識論争、高句麗の歴史帰属問題がかかわっている。そこには韓国史としての高句麗の正統性を「韓流」コンテンツとしてアジアに発信する韓国の文化戦略がみてとれるという。しかも「現代の中国ナショナリズムに対抗するために制作された韓国の高句麗ドラマの民族主義的モチーフは、植民地時代に日本帝国主義に対抗するために創出された近代的な言説である」と指摘されている。この再帰性に注目すると、高句麗ドラマを受容する日本の「韓流」ファンをどう位置づければよいのか。「韓流」ファンの汎アジア性と高句麗ドラマのもつ「韓流」プロパガンダの歴史性との繋がりは、やはり批判的に看取すべきだろう。

「韓流百年の日本語文学」として成る本書には、日本人の朝鮮表象や朝鮮人作家の日本語文学、在日コリアン文学の現在などテーマ自体が多岐にわたる論考が収録されている。いまや朝鮮半島をめぐる認識も様変わりし、ある意味では日本語文学も、「植民地文学」がそうであったように古典となる日が近いのかもしれない。

い。私たちにできるのは、それら膨大なテキストをまずは的確に読み解き、歴史化することである。もちろんここには、植民地期の在朝鮮日本人たちの記憶も含まれる。木村一信「湯浅克衛と中島敦と——その時代・トポス・言葉」では、湯浅克衛と中島敦を例に在朝鮮日本人の「内地／外地」の位相に注目しながら、こう論じられる。「外地」、植民地といった制度は、人びとをして「引き裂かれた生活」や「大きな罅」を強い、かつ傷痕を残す。そしてそれ以上にその土地、地域、国ぐに人びとには、癒しがたい悲惨な出来事、体験、記憶を与える」。そして西成彦「後藤明生の〈朝鮮〉」では、一九七〇年頃の「小さな「旧植民地ブーム」「朝鮮ブーム」に焦点をあて、後藤明生の小説における朝鮮体験の記憶の方法論的導入を検証する。「後藤たちのような日本人にとって、植民地の内地人や現地人は、つねに心の隣人でありつづけ、しかもどこまでも他人の顔をして、彼らの記憶のなかで蠢いている」。日本による朝鮮の植民地化に始まった「韓流百年」の営みをとらえるなら、国境を越えて横断する文化を眺望するとともに、テキストに書き記された表象やそこに刻まれた記憶のひとつひとつを吟味する必要にせまられるだろう。本書はこうした試みの実践としてある。

（人文書院、二〇〇九年一〇月、四六版三三六頁、本体価格二八〇〇円＋税）

（なかね・たかゆき 愛媛大学准教授）